
僕と君が創った世界

藤上昌久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と君が創った世界

【Nコード】

N2796BA

【作者名】

藤上昌久

【あらすじ】

研究員の主人公は、地球の滅亡から人類を救うために異次元を創るが、

自分だけが異次元に移り住むことになってしまい、

恋人と離れ離れになってしまう。

自分がなぜ異次元に来てしまったのか理由を探り始めるが…。

…長いと思います。

モニターに映し出された夢のような光景に、それを創り出した若き研究員に、そこにいる全員目が向いていた。

ため息を漏らす者もいる。嘘のような、それでいて現実味のある素晴らしい話に言葉もないからだろう。

「あと数十年で太陽が消滅するという推測を打ち出した研究員もいます。」

真つ暗な未来など掻き消してくれる、確証などないが希望に満ちた未来。

そのせいか、うつとりとした目で研究員を見つめる学生がほとんどだ。

「しかしこの世界を創る事ができれば、人類は生き続けることができるのです。」

なぜなら、次元が変わるのだから。その言葉を引き金に、大きな拍手が鳴り響く。

「何か質問はありますか。」

一人の学生が手を挙げた。

「あの、どうして壁が曇りガラスになっているのですか？」

映し出されたそこにはいくつかおかしな点があったのだ。

ピンクの色、進むのが早すぎる時間、そして曇りガラスの家。

研究員は咳払いをしてから答える。

「それは……防犯上、透明なガラスではなくしたのですが……その……」

その頬はわずかに赤く染まっている。

学生や教授たちはその回答を期待して、なおのこと研究員を見つめた。

「愛しい人の行動を、いつでも監視できるように……です。」

お辞儀をした研究員は真つ赤な顔を隠すように俯いたままで、一瞬

にして空気が変わってしまった講義室を足早に退室したのだった。

目が覚めると、天井は微かな青色に見えた。身を擦って携帯を探す。爪に当たったそれを引きよせた。

「何時……？」

画面に映し出された時間を見て、慌てて上体を起こす。適当に寝ぐせを直すと、眼鏡を探した。

「十時、なんでだ……っ！アラームセットしてたのに！」
寝坊するなんて何年ぶりだろうか。そうだ、中学生の頃以来だ。

クローゼットからチェックの服を引っ張り出すと羽織った。しかし動作が止まる。雰囲気がおかしいのだ。

いつもと何がどう違うのか、はつきりとした説明はできない。おかしい。それは、予想もしていなかった事態。

恐る恐る振り返る。それは明らかに何度も見たことのある光景。しかし世界の常識に反している光景。

震える足で歩いて、その壁に触れた。ひんやりと冷たい。さらに、目を凝らせば向こうが見えてしまう。

「異次元……」

呟いてみて、しかし現実味などない。だってあれは一研究員が創り出しただけの幻想。決して出来上がってはいけない世界。

確かに僕は願っていた。この次元に来てしまう事を。ただ、時期が早すぎたのだ。

一瞬だけ壁越しに薄く映ったピンクをしっかりと見るため、窓へ寄って身を乗り出す。

ずっと遠くの国道はピンクに見えた。ただ注意して見れば、それぞれの車がそれぞれの柄を持っている事が分かる。

レースをあしらった可愛らしいもの、黒で大きくハートが書かれた派手なもの。

まるで絵本の中に迷い込んだようだ。僕はようやく、本当に異次元にいるのだと確信する。

座り込んで放心していると、目に入ったのだ。これだけの時間なのに、夕方を刺している時計の針が。

本棚にしまい込んだ大量のノートを取り出して、脱出方法を探した。

記されているのは各次元が出来たあらし。それを知った上での各次元の作り方。

ため息。ノートを投げ出して時計を見た。もうすぐ朝だった。

しかし、さっきの時間から朝になったのではなく、もう何日か経過して朝を迎えている可能性もあるのだ。

そうなる時計など何の必要もなくなる。早急に取り外した。

このノートのほとんどは僕が書いた。その証拠として、裏に僕の字で『寺澤崇之』と書かれている。

だから何処に何が書いてあるかなんて全て頭に入っているのだ。

ただせめてもの望みとして探していた。書いてあるはずのない脱出方法を。

一番端にある、他とは違うピンク色のノート。僕が書いたものではない。

手に取ると、可愛らしい字体で書かれた名前が目に入る。その名前を指でなぞって、呼んでみた。

しかし空気は何処にも僕の音を届けてくれない。からまわって空間に消えて、より部屋が冷たくなっただけだった。

気を紛らわせるために開くと、まるで声も匂いさえも蘇る感覚に襲われた。

色鉛筆で丁寧に塗られたピンク色の車が目に入った。彼女は絵が上手かったのだ。

『何だよこれ、こんな設定必要ない。』

『必要あるの!』

僕の手からノートを奪い取って、得意げに話します。

『ピンク色の車が走っていると、道路が可愛くなって、みんなが幸

せになるのよ。』

最初は馬鹿みただと思った。ピンクが好きじゃない人だっているだろう。

それに、彼女の言っている事は自分の願望を詰め込んでさらには無理矢理正当化したものに聞こえた。

第一これは研究の成果として発表するもの。余計な設定など付け加えられないというのに。

すぐ下にあるのは、水色の窓。ボールペンで線を引いて、曇りガラスと書かれている。

『これは絶対に外しちゃだめよ。』

『嫌だ。発表するのは僕だぞ。こんな恥ずかしい事、言えるわけない。』

『だめ。これは貴方を四六時中監視するのに必要なものなの。』

どンドン渦巻く過去の映像に声。発表する時に恥ずかしかった事など消えて、ただ虚無感に包まれていた。

彼女の話す事はいつも魅力的で、冗談のようにも聞こえた。だから僕は彼女の考えを全て否定した。

そして罪滅ぼしなんて名付けて、その甘美な世界を人前で話した。本当はあの場に、彼女も一緒に立つはずだった。それができなかつたからこそ、僕はより卑怯な人間と化しているのだ。

最後まで、彼女は僕に微笑み続けてくれた。僕はそれが怖くて、彼女のノートを汚した。

ページの最後を、彼女は見たのだろうか。書き殴った、僕の汚い字を。

上着を羽織ると何度も周りを確認しながら外に出た。元の世界と変わった事はほとんどないが、人はゆっくり足を運ぶ。

あの忙しいふりの世界とは大違いだった。しかし時間は早く過ぎてしまうのだ。移動だけでどれだけ時間がかかるか考えたら恐ろしい。

大学を目の前にして、本当に何も変わっていないのだと再度思う。異次元は僕のいた次元と特に変わらない。地形や人民など。特殊な設定がいくつか加わっているだけ。

そんなものを生み出した理由はやはり、太陽の消滅、地球の滅亡から逃れるためだった。

大気や水の存在する惑星が発見される日は、そう遠くないだろう。

政府がそれを発表したら、各国の人類は湧くのだろう。

死を目前としてなお貪欲な人類なのだから。

しかし発見された惑星に辿り着くまでに、どれだけの時間がかかるか。

科学者たちは人類が喜ぶ情報しか与えない。そうして期待させている間に地球は……。

それを防ぐためにも、どうしても異次元を創り出す必要があったのだ。だから僕は大学時代からの時間を費やして成果を上げた。

出来上がったそれはまるで夢だった。その場にいた学生も教授も、目を輝かせて僕とその成果を見つめていた。

しかし時間がたっても政府からも科学者からも連絡は来なかった。

研究所長や教授たちは重大な事だから、知らせなければならぬと言っていたのに。

異次元を存在させるには、科学者の力が必要不可欠だった。いくら創り方を記したところで、僕には力などないのだから。

来る日も来る日も連絡を待った。期待していると知られるのが恥ずかしくて、所長たちの前では何でもない顔をしていた。

そうして本当に何でもなかったのだと認めた日、僕は世界を裏で操る汚い奴らと同じなのだ気づいた。

あの学生たちの希望を得た目。偽物だけでそうさせて、僕はやはり何もできなかった。

しかしどうだろう。異次元は存在したのだ。僕の知らないところで校内に足を踏み入れ、すれ違う人に会釈をしながら研究室に向かった。

輪にたくさん連なった中から研究室の鍵を探して、差し込んだ。手のひらに違和感。鍵が開いていた。

慌ててドアを開ける。研究員が驚いたように振り返った。三人もいる。

「何してるんですか！ 勝手に入るなんて……っ！」

怒鳴るような声で言っつて、中へと歩いてきた僕に向けられたのはただただ不思議そうな顔。

一度手は止まっつているものの、依然握られたピーカーなど、研究をやめて部屋を出る意思などないよう。

「聞いてるんですか。」

「寺澤さん……どうしたんですか？ ここでいつも俺たち、研究してきたのに……。」

理解できずに彼を見つめた。僕は彼を知っているはずなのだ。元の次元で何度か会話をしたのだから。

くせの強い髪をしていて、前までは大きい黒縁の眼鏡をかけていた。しかしこの前、「コンタクトに変えたんですよ。」と恥ずかしそうに微笑んで言っつていたのを覚えている。

名前が思い出せない。記憶が近づくたびに、目の前でシャッターを切られたように視界が暗くなっつて思考は遮られるのだ。

「疲れているんですよ。最近ずっつと個人研究室にこもっつていましたからね。」

そう言っつてパソコンから顔を覗かせた彼の事も、名前まで正確には思い出せない。相手に関する記憶だけは映像のように浮かんでくるのに。

彼は少し綺麗な顔立ちをしていて、見た目だけでは研究員だと思えない容姿をしていた。そして僕は彼を憎んでいた。

彼は僕と彼女がいつも一緒にいる事を知っつていながら、彼女に想いを伝えたのだ。

僕には自信などなかった。彼ほど美しい男が彼女を求めれば、僕なんかは捨てられてしまうのではないかと怖がった。

そんな僕に、彼女は「呆れた」とだけ言っていた。

今だって汚い感情が胸中を渦巻いている。心臓が揺さぶられて、頭もぐらつく感覚が気持ち悪い。

「……そうですね。疲れているようです。すみませんでした。」

いつも僕が使っていた机の上に、元の次元で最後に見たビーカが置いてあった。かばんを置くと中身を確認する。

透明な、しかし薄く紫がかった液体が揺れている。

「こ、これ」

「あ、それ頼まれてたものです。惑星で発見されるであろう水の予想です。」

惑星。その言葉に嫌な予感がした。一番下の引き出しを開けると、

『人類が移り住むための異次元』というタイトルの書かれた書類を探した。

するとすぐに見つかったのだ。『人類が移り住むための惑星』という書類が。

異次元で僕に用意されていた立ち位置。それは惑星についての研究員。

異次元にいる今、“異次元”など全くの別物になってしまったためののだろうか。

喪失感に襲われて、喉の奥がつかえたようにため息さえ出なかった。

このビーカには“異次元”の模型が入っていたのだ。特殊なレンズを通してしか見る事が出来ない、しかし確かにそこにあるはずのものが。

こんなにたくさん研究員はいなかった。僕と彼女の二人で創ったものだった。

いわば愛の結晶。それが壊されたのだ。

俯いた僕に影ができた。見上げると、すぐ横に女性の研究員が立っていた。

彼女と最も仲良くしていた女性だ。彼女がまるで妹のように可愛い

子だと言っていた女性だった。

「あの……君島さんは、今日も来ていないんですか？」
時間が止まったのだ。空気の循環が止まったのだ。色彩の流れが止まったのだ。僕の心臓も止まってしまえばよかったのに。

ノートに可愛らしく書かれた名前と、僕の書き殴った字が交互に浮かんで、気付いたら僕は答えていた。

「彼女は死んだはずだ。」

目の前の女性は怪訝そうな顔をして、見渡す。研究員たちが顔を合わせて、僕を見た。

痛々しい腫れものを見る目だった。

「寺澤さん、本当に疲れているんですよ。仮眠してきてください。」

「違う、僕は」

「大丈夫です。研究成果の発表までにはまだ時間がありますから。私たちに任せてください。」

腕を引っ張って、仮眠室に連れて行かれる。男二人相手に抵抗しながら、僕は必死になって叫んだ。

「彼女は死んだんです！ 研究発表の前に、病状が悪化して死んだんです！ もう、もう」

傍からみた僕の気持ち悪さは、彼らの眼球に反射して確かに伝わった。

「もう、彼女はいない！」

「君島さんには連絡しておきますから。ゆっくり休んでください。」
扉が閉ざされた。彼女がその電話に対応するわけがない。なぜなら彼女はもうこの世にいないのだから。

そう言ったところで誰も理解してくれないのだと知った。同時に怖くなった。

僕が望んだことなのに、彼女が存在する事が怖くなった。

仮眠室の扉が開けられる。所長が満面の笑みを浮かべて、興奮した様子で僕に言った。

「政府から電話があつたぞ！ 実現するんだ、寺澤の創つた異次元が！」

微かに僕を包んでいた心地よい眠りなど吹き飛んで、僕は慌てて飛び起きる。

電話だけだと言つのに髪も服も整えると、眼鏡をかけて飛び出した。ついに連絡が来た。僕と彼女の夢は実現する。

所長が差し出した受話器を握って、震える声で対応する。手のひらが汗で滑る。

所長の輝く目が、あの日見た学生の希望に満ちた目と重なつた。期待させただけではなかつたのだ。僕は確かに叶える。夢のような世界を創るのだ。

「正式に話を進めたいって、近々僕、官邸に呼ばれるみたいです…」

受話器を置いて崩れ落ちたところで、その状況を確認として自分に言い聞かせるように言つた。

所長は何度も僕の肩を叩いて、「おめでとつ」「良かったな」と口にした。

顔の内側がどんどん熱くなって、泣きそうだが堪えるように頷く。異次元に僕だけが移動してしまつたなんて、悪い夢だつたのだ。だつてこうして今、異次元は実現する。

スーツは大事な時だけに着るため、クローゼットの奥の方にしまつてあつた。薄く埃がかつていたが、クリーニングに出している時間などない。

一度袖を通してみる。サイズは変わっていなかったようだ。思い立って部屋を出た。リビングに向かうと、キッチンの方からいい匂いが漂ってくる。

まさか。

恐る恐るドアを開けると、そこにはピンクのエプロンを纏って、料理をしている彼女がいた。

心臓がうるさくて、僕の声など掻き消されてしまいそうだ。

彼女が振り返る。いつもの可愛らしい笑顔で。僕を幸せにする笑顔で。

「崇之、どうしたの？ スーツなんか着て。」

菜箸を置くと、僕に歩み寄って楽しそうに笑う。全然似合っていないよ、なんて意地悪を言っただ。

「決まったんだ。異次元がやっと創られる。僕らの夢が、叶うんだよ。」

震える声で、それを彼女に初めて告げる。彼女は驚いたように目を見開いて、そこに涙をためた。

満面の笑みを浮かべてから僕に抱きつくと、いい匂いが一遍に鼻を伝って身体中に広がった。

「崇之、本当にありがとう。貴方のおかげで私……今がいちばん幸せ。」

「うん、僕もだ。」

「すごく嬉しい。もう死んじゃってもいいくらい。」

僕は笑って彼女の頭を撫でる。

「死んじゃったら、僕らの夢が叶わないぞ。」

「そしたらあの世でも私は寺澤になるの。」

嬉しいのに、胸の奥が真っ黒いものに突かれて痛んだ。彼女の頭に添えられた手に力がこもる。

抱きしめれば折れてしまいそうで、そんな彼女の中からはたくさん
の魅力が溢れているのだ。

何故だか泣きそうになった。

「君が死ぬなら僕も死ぬ。ずっと一緒だ。」

「あの世でも、異次元に行っても、生まれ変わってもね。」

彼女は生きていたのだ。死んでしまったなんてそんな事は夢だった。だって僕は今、彼女を抱きしめている。

僕は彼女との二人分の夢を背負って官邸に向かった。今僕の目は、あの日の学生と同じだ。

しかし目の前に座るたくさん政治家や科学者の顔は険しく、僕を

睨みつけているようだった。

「どういう、事ですか。」

「何度も言わせないでくれませんか。だから、異次元は創れないと言っているんです。」

そう言っただけで科学者はため息をつき、僕を面倒臭そうに一瞥した。ついさつき後ろへ下がった政治家が、スーツケースを僕の目の前に置いた。

並べられたそれはいかにも物々しく、まるでテレビの中の世界だ。開けられたそこは今までに見たことのない量の札束が並んでいた。目が眩むとはこういう事だ。金色に見えるその中から、何人も福沢諭吉が僕を嘲笑う。

「君の意志で断ってくれないか。」

顔を上げると、そこは別世界。僕がその条件を呑むだろうと思う汚い人間を前に、僕は子供のように小さな存在。

首を縦に振れ。全員の目がそう言っている。僕には理解できなかった。惑星に辿り着くよりも簡単なこの方法が受け入れられない理由が。

視界が滲んで、僕は思い切り横に首を振る。

「嫌です！ 絶対に嫌だ！」

この大金を手に入れば、僕と彼女の夢は叶うのだろう。形は大きく変わっていたとしても。

だから今から謝って手を伸ばせ。そしてこの場から逃げてしまえばそれでいい。

「僕はずっと異次元の研究ばかりしてきた、こうして実を結ぶと思っただけなのに、」

できないのは、僕が望んで彼女の笑顔に縛られているからだだった。

「異次元の計画については必ず実行してもらいます！」

周りがやけに騒がしくて、やっと顔をあげる。そこには銃を向ける男がいた。

「な……」

「やめなさい！」
制止の声が聞こえて、それでも確かに銃声は響き渡ったのだ。視界が真っ黒に染まった。

「寺澤さん。」

目を開けると、覗きこむ研究員の顔が見えた。くせ毛の彼だった。
「すごく魔されていましたよ。休暇を取ってはいかがですか。」
カーテンが開けられて、眩しい光が入り込む。照らされた床は真っ白で、記憶がかき混ぜられた。

「寺澤さんが身体壊したら、寺澤さんの元で研究している俺たちまで困るんですからね。」

「ここは……どこですか。」

「はい？」

僕の夢は、紛れもなく現実だった。研究成果の発表が終わった後の事が、断片的に思い出されたのだ。

「研究所の仮眠室です。しっかりしてくださいよ……。」
彼女の感触は柔らかく、今でも鮮明に思い出せる。鼻腔をくすぐる甘い香りも。

「……本当に現実なんでしょうかね。」

あの現実が夢だと証明するのは彼女の存在だ。研究成果の発表の前、確かに彼女が僕の目の前で息を引き取った。

「分からなくなりました。僕がどこで生きているのか。」
ああして彼女を抱きしめることも、何もかも僕の願望だ。決して叶わないと分かっていたはずなのに。
目覚めなければよかった。彼女はあの世で僕の姓を名乗るようになるのだ。

僕も行ってしまえばよかった。彼女と二人で暮らせる場所へ。

「……コーヒー、淹れておきますからね。」

まだ夢を見ている感覚を引きずったまま、時間の進む早さとともに

に訪れる目まぐるしく変化する光の中、僕の足は最後に見た場所へ向かっていた。

異次元の政府は僕を覚えているだろうか。もうそうであつたら助かる。

スーツを着てくるはずが、すっかり忘れてしまつていたようだ。ただ彼女のノートを握りしめて、私服のままだった。

ふらふら歩いていると、ピンクの国道に、ポツリと黒が浮かんでいるのが見えた。

ぼんやりと眺めていると、走ってきたそれは僕の目の前で止まつた。「やつと見つけた。」

ポケットに突っこまれた手。僕に銃を向けた男だった。「随分探したぞ。」

厭らしい笑みを浮かべ、握られた黒を僕に向ける。その穴に吸い込まれてしまいそうな程、僕はそれを見つめていた。

「なんだ、驚かないんだな。」
まあいいか、そう呟いて引き金に力が加わる。

「……教えてください。」
「何をだ。」

「僕がなぜここにいるのか、それと、なぜ異次元の話が受け入れられなかったのか。」

これから死ぬのにか、鼻で笑われたが構わなかった。あの世に行つたら彼女に話すのだ。

僕が確かに異次元に行ったこと。彼女の夢が叶えられるということ。銃を向けたまま、男は歩みよってくる。

「お前が優秀すぎたからだ。」
「それでは理解できません。異次元は、人類を救えた。」

金属音と、鳥肌の立つ冷たさ。頭に突きつけられた銃の重さがよく分かった。

「異次元を創つたらどうしたつもりだ。神にでもなるつもりだったのか。」

男の言っている事が理解できずに見上げると、その顔に表情はなかった。

僕は機械に殺されるようだ。

「世界がお前の支配下に置かれちゃ困るんだよ。」
大きな風が吹く。

風に乗って、彼女の匂いがどこからか香ってきた。

「そんなこと……」

「だから俺がお前を殺すことは、あの時止めようとしていた奴らも了承していた事だったんだよ。」

金属音が近くでする度、僕に死が近づいてくる。

それは同時に彼女に近づくことになるのだ。

心地よく、恐怖さえも柔らかな甘さに包まれて、どうやら心が麻痺してしまっただろうだ。

必死になって思っていることはただ一つ。彼女のことだけ。

「お前が叫んだ直後、お前の後ろにブラックホールのような円形のもの浮かんた。」

レンズを通して見たそれが浮かぶ。できた！　なんて言っただけと手を叩きあつて喜んだこと。

ただ、彼女は少し不満そうだったが。黒なんて可愛くない、と。

「俺が銃を向けたら、お前は慌ててそこに飛び込んだんだろ。」

記憶は銃声が聞こえた直後で途切れているのだ。だったら僕は死んでいなければおかしい。

そうであれば、僕の見ただけの黒は異次元の色だったのだろうか。

一度も肉眼で見られなかったのに。もしかしたら、彼女が助けられたのだろうか。

そうだと嬉しい。

「知らないなんて言わせないぞ。」

骨が痛むほど押し付けられて、僕が抵抗しないことを悟ると、男は引き金を引いた。

今度こそ真つ黒だ。

すぐに白に包まれて、僕は君に会いに行く。

目が覚めると、天井は微かな青色に見えた。身を擦って携帯を探す。爪に当たったそれを引きよせた。

「何時……？」

画面に映し出された時間を見て、慌てて上体を起こす。適当に寝ぐせを直すと、眼鏡を探した。

そして今まで見ていた夢を思い出して凍りついた。

クローゼットを開けると、そこに取りつけられた鏡を覗いて絶望する。

額に開いた穴が、どんどん再生していた。

「生きてる……。」

僕を嘲笑っていたのは諭吉なんかじゃない。僕がノートの最後に書き殴ったあの字だ。

彼女は生まれつき心臓が悪く、余命も短かった。彼女と出会って色づいた僕の命と違って、彼女の命はどんどん色褪せていたのだ。

ずっと一緒にいよう。そんな在り来たりな言葉を交わしたのに、彼女がいなくなってしまうなんて悔しかった。

人類を救うため。そう理由をつけて、彼女と異次元を創り上げたのに。

異次元に移り住む前に死んでしまった彼女には適用されないのだ。僕が私的に作った設定など。

『君は死なない。』汚い字は、彼女の心に届いたのだろうか。

崩れ落ちて、何度も何度も床を叩く。痛みが突き刺さっても、血が滲んでも、僕の身体は再生するのだ。

僕は死なない。即ち彼女に会えない。

失ってしまった彼女の声が聞こえてきた。

『あ、また私の作った設定消そうとしてるでしょ！』

『時間は速くない方がいい。今と同じにする。』

『絶対だめ！』

「理由は？」

「時間を速くすれば、貴方とも早く結婚できるの。」
「やっぱり必要のない設定だったじゃないか。だって僕は君と会えない。君に触れられない。」

早く来てほしいと願う未来もないまま、ただマネキンのように生きるなどつらいだけなのに。

泣き疲れて床に寝転がりながら、天井越しの青空を眺めていた。
異次元の僕は、惑星について研究していた。異次元の地球も、太陽の消滅による死が待っていたのだ。

僕が行っていた研究など、最初から意味のないものだったようだ。
だったら残された道は一つだ。

消滅してしまえばいい。

再生などできないくらい勢いをつけて、人類が死滅してしまえばいいのだ。

(後書き)

あらずじ下手で申し訳ないです(汗)
読んで下さった方はぜひ感想をください。
いろいろ聞かせてもらえると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2796ba/>

僕と君が創った世界

2012年1月7日02時50分発行